

「イエシュアの十字架」

ヨハネの福音書 19:23~34

はじめに

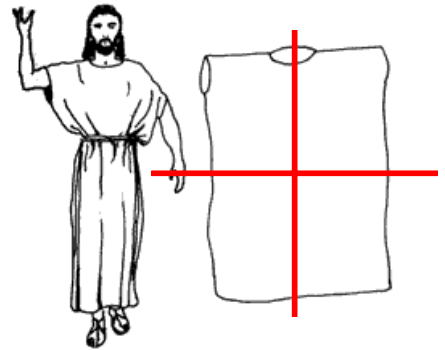
【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

19:23 さて、兵士たちは、イエスを十字架につけると、イエスの着物を取り、ひとりの兵士に一つずつあたるよう四分した。また下着をも取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。

19:24 そこで彼らは互いに言った。「それは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」それは、「彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた」という聖書が成就するためであった。

前回のメッセージで、ついにイエシュアは十字架にかかられましたが、その際にローマ兵によって剥ぎ取られ、四つに切り分けられたイエシュアの着物、そしてくじ引きにされた下着についての、その意味について述べました。「着物」という言葉はヘブル語でベゲド(בגד)と言い、「着物」という意味以外に「裏切り」という全く異なった意味を持っていることから、この着物と下着は、神の民として選ばれながら、その神様を「裏切り」偶像礼拝に走ったイスラエルの民を指し示していると考えられることを述べました。イエシュアの着物と下着がローマ、つまり異邦人によってはぎ取られたように、B.C722年アッシリヤによって「四方」すなわち世界中に離散させられた北イスラエル王国、そしてB.C586年バビロンによって捕囚となりながらも、その70年後に帰還を果たした南ユダ王国がそれに当たると考えられることを述べました。この解釈を踏まえて、次の記述を考えてみたいと思います。



1. 対比

19:25 兵士たちはこのようなことをしたが、イエスの十字架のそばには、イエスの母と母の姉妹と、クロバの妻のマリヤとマグダラのマリヤが立っていた。

「兵士たちはこのようなことをしたが」と記されています。これは明らかに先に記された、兵士たちの行ったことと対比させる形で、この箇所が記されているということだと考えられます。イエシュアの十字架のそばに、四人の女性が立っていました。①イエシュアの母(すなわちマリヤ)、②イエシュアの母(マリヤ)の姉妹、③クロバの妻マリヤ、④マグダラのマリヤの四人です。いずれもマリヤ本人もしくはマリヤにつながりのある女性ばかりです。これは偶然でしょうか。神様のご計画に偶然などありません。聖書に記されたすべての人物、場所、状況、時には意味があるのです。ではこのマリヤという人物の必然性、その意味について考えてみたいと思います。マリヤという名前は、ヘブル語では(מריָם)このように表記され、ミルヤームと読みます。日本語の旧約聖書にミリヤムと表記されている女性(モーセの姉である女預言者)が登場しますが、それがこのミルヤームです。そしてこのマリヤ、ミルヤームという名は、マル(מר), 訳すと「苦い、苦々しい」とい



う意味の言葉と、ヤーム(יָם)、訳すと「海」という意味の言葉がつながった言葉であると考えられます。まず最初のマルという言葉が、聖書で最初に使われた箇所が創世記 27:34 の出来事です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

27:30 イサクがヤコブを祝福し終わり、ヤコブが父イサクの前から

出て行くか行かないうちに、兄のエサウが獵から帰って来た。

27:31 彼もまた、おいしい料理をこしらえて、父のところを持って来た。そして父に言った。「お父さんは起きて、子どもの獲物を召し上がることができます。あなたご自身が私を祝福して下さるために。」

27:32 すると父イサクは彼に尋ねた。「おまえはだれだ。」彼は答えた。「私はあなたの子、長男のエサウです。」

27:33 イサクは激しく身震いして言った。「では、いったい、あれはだれだったのか。獲物をしとめて、私のところを持って来たのは、おまえが来る前に、私はみな食べて、彼を祝福してしまった。それゆえ、彼は祝福されよう。」

27:34 エサウは父のことばを聞くと、大声で泣き叫び、ひどく痛み悲しんで父に言った。「私を、お父さん、私も祝福してください。」

27:35 父は言った。「おまえの弟が来て、だましたのだ。そしておまえの祝福を横取りしてしまったのだ。」

27:36 エサウは言った。「彼の名がヤコブというのも、このためか。二度までも私を押しつけてしまって。私の長子の権利を奪い取り、今また、私の祝福を奪い取ってしまった。」また言った。「あなたは私のために祝福を残してはおかれなかったのですか。」

27:37 イサクは答えてエサウに言った。「ああ、私は彼をおまえの主とし、彼のすべての兄弟を、しもべとして彼に与えた。また穀物と新しいぶどう酒で彼を養うようにした。それで、わが子よ。おまえのために、私はいったい何ができようか。」

27:38 エサウは父に言った。「お父さん。祝福は一つしかないのですか。お父さん。私を、私をも祝福してください。」エサウは声をあげて泣いた。

この出来事は、アブラハムの子イサクの子ヤコブが、年老いて盲人になった父イサクを騙し、また兄のエサウを出し抜いて、長子の祝福を奪うという場面ですが、ここでエサウが「ひどく痛み悲しんで」と訳されているのが聖書で最初のマルです。この結果ヤコブはアブラハム、イサクに表された神様の契約、約束を受け継ぎ、やがてイスラエルと呼ばれるようになり、彼の12人の息子たちが族長となって民族化し、やがて国家を形成していきます。一方兄エサウはエドム人の祖、すなわち異邦人と見なされるようになります。エサウはマル、すなわち「ひどく悲しんで『私をも祝福してください』と泣き叫びました。ここでエサウが「ヤコブではなく私を祝福してください」と言わず「(ヤコブだけでなく)私をも祝福してください」と言ったことは重要です。つまりこれは「イスラエルとともに祝福してください」というエサウすなわち異邦人の祈り、イスラエルとともに異邦人をも祝福してくださいという悲痛な叫びであると考えられます。そのような意味あいが、このマルという言葉には込められていると考えられます。ですからマリアという名と、十字架のそばに立っていたこの「四」人の女性とは、「四」方すなわち全世界の異邦人が、イスラエルとともに祝福されますように、というマルすなわち悲痛な祈り、願いを指し示していると考えられます。

そして次にヤーム「海」について、この言葉が聖書で最初に使われるのが創世記 1:10 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

1:9 神は仰せられた。「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現れよ。」そのようになった。

1:10 神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見て良しとされた。

これは神様の天地創造の御業の第三日についての記述ですが、「海」ヤームとは、神様が「集まれ」と仰せられた水が「集まった」所という意味があることが解ります。このようにマリヤ、すなわちミルヤームという名前を構成する二つの言葉、マルとヤームの持つ本来の意味を考え合わせると、「イスラエルとともに祝福されるために集められる異邦人」という意味があると考えられます。これは創世記 12:3 で神様がアブラハムと交わされた契約の内容と一致します。

【新改訳改訂第3版】

創世記

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

このように、イエシュアの十字架のそばに立っていた四人の女性、そしてマリヤ、すなわちミルヤームという名の存在は、偶然ではなく、アブラハムの子イサクの子イスラエルとその子孫によって地上の全ての民族が祝福されるという世界を建て上げるという、神様のご計画を指し示すための必然的な存在であったと考えられます。

2. 母

19:26 イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます」と言われた。

19:27 それからその弟子に「そこに、あなたの母がいます」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。

これはユダヤ人特有の強調表現であるパラレリズム（対句法、並行法）によって一つの内容が言い換えによって二度繰り返されることでその内容が強調されている文章だと考えられます。すなわち

「女の方。そこに、あなたの息子がいます」というメッセージが

「弟子に、『そこに、あなたの母がいます』」と言い換えられているということです。

どちらのメッセージも同じ目的、同じ内容を指しています。これがパラレリズム（対句法、並行法）と呼ばれる強調表現です。このように強調されるということは、この出来事が非常に重要な意味を持っているからだと考えられます。さらに次の 28 節で、イエシュアは「すべてのことが完了したのを知って」と記されています。つまりこの 26、27 節に記されたこの出来事が、イエシュアの御業の「完了」を指し示しているということになります。ではイエシュアは一体何を指し示して、イエシュアの母にこのようなことを言われたのでしょうか。

ヘブル語で「母」を意味する言葉はエーム(אם)と言います。このエームは「母」という意味の他に「分岐点」という意味も持っています。またこのエームが聖書で最初に使われた箇所が、創世記 2:24 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

2:24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

このように、「母」エームには、「分岐点」という意味にもあるように「離れる」という意味あいがあると考えられます。事実イエシュアはここで母を愛する弟子に託し、母から「分岐する、離れる」ことを宣言しておられます。その目的は「妻と結び合い、一体となる」ためであると記されています。これはキリストすなわちメシアであるイエシュアと、花嫁なる教会を指しています。なぜならエペソ人への手紙 5:31 にこうあるからです。

【新改訳改訂第3版】

エペソ

5:31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」

5:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

このように、イエシュアの十字架によって表された出来事には、神様の「奥義」、秘められた真理があります。それは神様とイスラエル、そしてキリストすなわちメシアであるイエシュアと教会が一つになることを指し示しています。一見ただの状況説明のような記述の中に、隠された神様のご計画が表されているのです。そしてこの「奥義」は偉大であると記されています。なぜならそれは次に記されている「すべてのことが完了した」、すなわち神様のご計画の完成を指し示すものであるからです。

3. 渇く

19:28 この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために、「わたしは渇く」と言われた。

「渇く」というこの言葉が指し示すものは何でしょうか。ヘブル語でこれをツァーメー(צמא)と言います。この言葉が聖書で最初に使われた箇所は、出エジプト記 17:3 の出来事です。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト記

17:1 イスラエル人の全会衆は、【主】の命により、シンの荒野から旅立ち、旅を重ねて、レフィディムで宿営した。そこには民の飲む水がなかった。

17:2 それで、民はモーセと争い、「私たちに飲む水を下さい」と言った。モーセは彼らに、「あなたがたはなぜ私と争うのですか。なぜ【主】を試みるのですか」と言った。

17:3 民はその所で水に渇いた。それで民はモーセにつばやいて言った。「いったい、なぜ私たちをエジプトから連れ上ったのですか。私や、子どもたちや、家畜を、渇きで死なせるためですか。」

17:4 そこでモーセは【主】に叫んで言った。「私はこの民をどうすればよいのでしょうか。もう少しで私を石

で打ち殺そうとしています。』

17:5 【主】はモーセに仰せられた。「民の前を通り、イスラエルの長老たちを幾人か連れ、あなたがナイルを打ったあの杖を手にとって出て行け。

17:6 さあ、わたしはあそこのホレブの岩の上で、あなたの前に立とう。あなたがその岩を打つと、岩から水が出る。民はそれを飲もう。」そこでモーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのとおりにした。

17:7 それで、彼はその所をマサ、またはメリバと名づけた。それは、イスラエル人が争ったからであり、また彼らが、「【主】は私たちの中におられるのか、おられないのか」と言って、【主】を試みたからである。このようにツァーメー「渴く」とは、モーセを通してエジプトを脱出し、荒野へと導かれたイスラエルの民が、飲み水がないことをつぶやき「主は私たちの中におられるのか、おられないのか」と言って、「主を試みた」という出来事を指し示しています。つまりイスラエルの民が、単にのどが渴いたというのではなく、神様が私たちを生かしてくださる、救ってくださることに對するうえ渴き、つまり神様に対するツァーメー「渴き」をもってつぶやいたということです。そしてその結果モーセは「ホレブの岩を打つ」とあります。この「ホレブの岩」とは、イエシュアを指し示していると考えられます。なぜならこのホレブ(בְּרֶבֶב)は、ハーレーヴ(בְּרֶבֶב)「渴いている、干からびる」という意味の動詞、またはハーラヴ(בְּרֶבֶב)「虐殺される、殺される」という意味の動詞が語源となっていると考えられるからです。まさにイエシュアは十字架によって「渴き」を覚えられ、そして「虐殺された」のでした。そしてモーセが神様の杖で「ホレブの岩」を打ったように、イエシュアもまた人によってではなく、神様によって打たれたことが表されていると考えられます。それは打たれたホレブの岩から湧き出た水によって、イスラエルの民が生きたように、イエシュアの口から語られた神様の御言葉によって、それを信じる全ての人々が永遠に生きるためであり、また「【主】は私たちの中におられるのか…試みた」ように、イエシュアは人の中に存在する神、つまり神様が人の姿を持たれた御方であるのかどうかということが「試みられた」、試される為でもあったということが表されていると考えられます。

このように解釈するならば、旧約聖書に記された出来事は、単なる歴史的事実ではなく、後に成就される神様のご計画を指し示す「型」であったと考えることができます。それが「聖書が成就するために…」と記された理由であると考えられます。

4. 酸いぶどう酒

19:29 そこには酸いぶどう酒のいっぱい入った入れ物が置いてあった。そこで彼らは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソブの枝につけて、それをイエスの口もとに差し出した。

19:30 イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。

「酸いぶどう酒」と訳されていますが、ヘブル語ではホームツ(חֶמֶץ)といい、ぶどう酒が過度に発酵して酢酸ができたため、酸っぱくなった物なのだそうです。ですから日本語の旧約聖書ではこれを「酢」と訳しています。イエシュアがこの「酢」を受けられたことを預言して、詩篇 69:21 にこのように記されています。

【新改訳改訂第3版】

詩篇

69:21 彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました。

この御言葉が成就するためにイエシュアはホームツを受けられたと考えられます。それはすなわち詩篇 69 篇の全てが成就することを示しています。その詩篇 69 篇は以下の預言をもって完結しています。

【新改訳改訂第 3 版】

詩篇

69:35 まことに神がシオンを救い、ユダの町々を建てられる。こうして彼らはそこに住み、そこを自分たちの所有とする。

69:36 【主】のしもべの子孫はその地を受け継ぎ、御名を愛する者たちはそこに住みつこう。

イエシュアが十字架にかかれた目的、その完了を指し示すものがこれです。すなわち「シオン、ユダの町々」とも言い換えられるイスラエル王国が、神様の御手によって建て直され、主のしもべの子孫、すなわちイスラエルの民が再びそこに住むようになることです。前回のメッセージでも何度も述べたようにイエシュアは「ユダヤ人の王」イスラエルの王です。国王とは、治めるべき国民がいるからこそ国王なのです。ですから神様のご計画が「完了」するためには、「ユダヤ人の王」イエシュアが治めるユダヤ人、すなわちイスラエルの民が集められ、国王であるイエシュアの統治の下で、そこに「住みつく」必要があるのです。

5. 大いなる日

19:31 その日は備え日であったため、ユダヤ人たちは安息日に(その安息日は大いなる日であったので)、死体を十字架の上に残しておかないように、すねを折ってそれを取りのける処置をピラトに願った。

「その安息日は大いなる日」、これはただの安息日ではない特別な安息日、安息日の中の安息日だということです。その意味を知るにはイエシュアが十字架にかかれた日が、過ぎ越しの祭りの時期であったことを確認する必要があります。

【新改訳改訂第 3 版】

レビ記

23:5 第一月の十四日には、夕暮れに過越のいけにえを主にささげる。

23:6 この月の十五日は、主の、種を入れないパンの祭りである。七日間、あなたがたは種を入れないパンを食べなければならない。

23:7 最初の日は、あなたがたの聖なる会合とし、どんな労働の仕事もしてはならない。

23:8 七日間、火によるささげ物を主にささげる。七日目は聖なる会合である。あなたがたは、どんな労働の仕事もしてはならない。」

ヨハネの福音書において、イエシュアは「過ぎ越しのいけにえ」として十字架にかかれたことを強調しています。過ぎ越しの祭りとは、このように毎年ユダヤの暦でニサンと呼ばれる「第一の月の十四日」に行われました。そしてその翌日から引き続き、七日間にわたり「種なしパンの祭り」という祭りが行われました。その七日間の最初の日と七日目の最後の日、「聖なる会合」が開かれ、安息日と同様に一切の労働が禁じられました。しかもイエシュアが十字架にかかれたのは金曜日でした。ユダヤ人は土曜日が安息日ですから、この年の種なしパンの祭りの最初の日は、従来の安息日と重なる形となりました。このような「聖なる会合」と重

なる安息日を特別に「大いなる日」と呼びます。その「大いなる日」の「備えの日」、すなわち前日にイエシュアが十字架にかかられたことが強調されています。「大いなる日」、一体それは何を指し示すのでしょうか。エレミヤ書の 30 章にこんな預言があります。

【新改訳改訂第 3 版】

エレミヤ書

30:7 ああ。その日は大いなる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。しかし彼はそれから救われる。

30:8 その日になると、…万軍の主の御告げ。…わたしは彼らの首のくびきを砕き、彼らのなわめを解く。他国人は二度と彼らを奴隷にしない。

30:9 彼らは彼らの神、主と、わたしが彼らのために立てる彼らの王ダビデに仕えよう。

この預言はイスラエルの回復、つまり「神の国、御国」の完成の預言です。ダビデの子イエシュアの十字架は、過ぎ越しのいけにえとしてだけでなく、「神の国、御国」の完成する日である「大いなる日」のことを指し示していると考えられます。「それはヤコブにも苦難の日」、ヤコブすなわちイスラエルが苦難に見舞われる日、そのイスラエルを救うためにイエシュアは地上に再臨され、「神の国、御国」を建てられる日です。すなわちイエシュアの十字架とは、終わりの時代に起こる大患難時代の最後に、イエシュアが地上再臨され、「神の国、御国」を建てられる日であり、その「大いなる日」の「備えのため」のものであるということを表していると考えられます。

6. イエシュアの骨

19:32 それで、兵士たちが来て、イエスといっしょに十字架につけられた第一の者と、もうひとりの者のすねを折った。

また十字架刑というものは、たしかに極刑すなわち死刑に相当するのですが、すぐに死ぬことができない死刑なのです。釘が刺さった手足の激痛と出血、そして貼り付けによる呼吸器系の圧迫によって貧血状態と窒息状態で苦しませながら、時間をかけてじわじわと殺していくという非常に残忍な死刑です。つまり時間をかけて醜態を存分に晒しながら、肉体的にも精神的にも追い詰めながら、ゆっくりと殺していくのです。長いものになると死ぬまでに数日かかることもあったそうです。血の臭いを嗅ぎつけた猛禽類が飛んできて、生きたまま肉を蝕まれるようなこともありました。その光景はあまりにも悲惨で、誰もが目を覆いたくなるようなものでした。それがローマの極刑、十字架でした。ところがその十字架につけると言った彼らユダヤ人の律法にはこのような規定がありました。

【新改訳改訂第 3 版】

申命記

21:22 もし、人が死刑に当たる罪を犯して殺され、あなたがこれを木につるすときは、

21:23 その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならない。木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。

ですからユダヤ人たちは、十字架にかけられたイエシュアを含む 3 名の足のすねの骨を折るように要求しました。

19:33 しかし、イエスのところに来ると、イエスがすでに死んでおられるのを認めたので、そのすねを折らなかつた。

足の骨を折る理由は、死ぬ時間を早めるためです。足の骨を折ることで、足の踏ん張りが利かなくなり、完全な宙づり状態、つまり両腕のみで全体重を支える形となります。ちょうど体育の鉄棒にぶら下がるような状態です。しかし手をくぎ付けられているので、たとえ手を放しても下に落ちることができず、無理やり引っ張られ続けます。次第に腕の筋力が疲れ、耐えられなくなると、肩の関節がはずれ、呼吸を更に圧迫するそうです。その結果、窒息効果が促進されて通常よりも早く窒息死に至らせます。イエシュアとともに十字架にかけられた二人の罪人は、そのすねの骨を折られました。しかしイエシュアの骨だけは折られませんでした。十字架刑は全ての骨の関節が外れる刑とも言われています。イエシュアの骨もことごとく外れたことが預言されています。

【新改訳改訂第 3 版】

詩篇

22:14 私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。

しかしイエシュアの骨は、一本も折られないことも預言されていました。

【新改訳改訂第 3 版】

詩篇

34:20 主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、碎かれることはない。

このように、骨の一本に至るまで、イエシュアという御方は旧約聖書の預言に則した存在であったということが解ります。まさに骨の髄まで、極みまで聖書の御言葉を体現された御方、それがイエシュアなのです。またイエシュアの骨が折られなかつた理由について、このような御言葉もあります。

【新改訳改訂第 3 版】

民数記

9:12 そのうちの少しでも朝まで残してはならない。またその骨を一本でも折ってはならない。すべて過越のいけにえのおきてに従ってそれをささげなければならない。

「過ぎ越しのいけにえのおきて」、ここに今一度、イエシュアがイスラエルの贖いのための過ぎ越しのいけにえであることが強調されていると考えられます。

また「骨」をヘブル語でエツェム(עצם)と言います。このエツェムが聖書で初めて使われる箇所が、創世記 2:23 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

2:22 神である【主】は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。

2:23 人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

2:24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

これは神様によって造られた最初の人である男(アダム)が、同じくそのあばら骨から造られた女(エバ)を見て言った言葉です。このように「骨」エツェムとは本来「女」、すなわち「男」と結ばれるその「妻」を指し示していると考えられます。折られることのなかったイエシュアの「骨」エツェムとは、イエシュアの妻、キリストすなわちメシアの花嫁である教会が守られることを指し示していると考えられます。それでは教会は「イエシュアの骨」であるという考えをもって以下の御言葉をもう一度見てみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】

詩篇

22:14 私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。

【新改訳改訂第3版】

詩篇

34:20 主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、碎かれることはない。

このように「イエシュアの骨」である教会は、「はずれる」けれども「碎かれない」のです。「はずれる」はヘブル語でパーラド(פָּרַד)と言い、「分ける、離れ去る」という意味があります。つまり教会は「碎かれることなく、離れ去る」のです。これは終わりの日の大患難時代を通ることなく「碎かれることなく」、イエシュアの空中再臨によって地上から携挙される「分けられる、離れ去る」教会を指し示していると考えられます。

【新改訳改訂第3版】

I テサロニケ

4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一しょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

では「イエシュアの骨」である教会とは、一体どのような教会でしょうか。その答えも「骨」エツェムによって示されています。

【新改訳改訂第3版】

詩篇

22:17 私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。

このように、「イエシュアの骨」である教会とは、イエシュアに、すなわち神様に数えられ、覚えられている者たちのことであり、またイエシュアに目を留め、見つめる者たちのことであると考えられます。ここで「見る」と訳されているヘブル語のラーアー(ראו)は、単に見るだけでなく、「注目する、知る、理解する」という意味の言葉です。イエシュアを見つめ、神様を知り、その御心、ご計画を理解する。それがヘブル語の「骨」エツェムが指し示す「イエシュアの骨」である教会のあるべき姿であると考えられます。ですから教会とは、それに属する人とは、正しい人、美しい人、賢い人、強い人のことではありません。また率直に言って賛美する人、祈る人、奉仕する人、伝道する人のことでもありません。教会とは、神様に数えられ、覚えられている人、すなわち神様に選ばれている人が、神様によって集められたもののことです。そして教会は、イエシュアだけに目を留め、神様を知る、理解する人、正確にはそのような人へと変えられる、変えていただける人々のことです。それがイエシュアに「これこそ、今や、私の骨からの骨」と呼ばれるイエシュアの妻となる、キリストすなわちメシアの花嫁なる教会であると信じます。

7. 血と水

19:34 しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出た。

イエシュアのわき腹に槍が刺し通され、そこから流れ出た「血と水」。これは一体何を意味するのでしょうか。「血」はヘブル語でダーム(דם)と言います。このダームが聖書で最初に使われたのが創世記 4:10 の御言葉です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

4:8 しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。

4:9 【主】はカインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか」と問われた。カインは答えた。「知りません。私は、自分の弟の番人なのではないですか。」

4:10 そこで、仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。

4:11 今や、あなたはその土地にのろわれている。その土地は口を開いてあなたの手から、あなたの弟の血を受けた。

これはアダムの子カインとアベルによって起こった、人類史上最初の殺人事件です。そこでアベルの「血」ダームが流され、アベルは死に、そして土地が「のろわれた」ことが記されています。このように本来ダームとは「死」と「のろい」を指し示す言葉であると考えられます。そして「水」はヘブル語でマイム(מים)と言います。このマイムの最初の言及は、創世記 1:2 にあります。

【新改訳改訂第3版】

創世記

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。

これは神様の天地創造の御業の初めの記述です。「水」マイムは、それ以前、すなわち永遠の昔からにすでに存在し、しかも「神の霊が水の上を動いていた」とあります。「動いていた」と訳されているラーハフ(לָהָף)は、親鳥がその翼でひなを覆って守るような意味あいがあります(申命記 32:11)。つまり本来の「水」マイムとは、「神様とともにあり、永遠に守られる」という意味があると考えられます。このように解釈するならば、「血」ダームと「水」マイムとは、全く対照的な状態を指し示していると言えます。イエシュアのわき腹からこれらの全く相反する二つのものが出てきたということは、救われるか滅びるかは、イエシュアによって決定するということを表していると考えられます。つまりイエシュアを神様が使わされた御子と信じ受け入れる者はすべて救われ、そうでない者、すなわちイエシュアを拒む者、信じない者、無視、無関心な者はすべて滅ぼされるという神様のご計画が表されているということです。このように、私たちが救われる「神様とともにあり、永遠に守られる」生かされる道は、イエシュアを神様の御子として受け入れ、この御方を信じること以外にないということです。

【新改訳改訂第3版】

使徒の働き

4:12 この方(イエシュア)以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」